

2010（平成22）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

*問五の波線部は、傍線部（4）より前に付されている。「先に問一～問四を解いてから、後で波線部の設問を考えよ」という、大学当局から受験生への解答誘導メッセージである。「出題者の意図を考える」などといった学力と無縁な問題に時間を浪費し、京大当局のメッセージを曲解するのではなく、素直に前から順に解いていけばよい。そうすれば自然と、問五の必須ポイントは「現在の小説」への言及であると気づくことができる。

問一

口承の物語では、子どもは語り手の肉声を通して物語の世界を身体に直接受け入れ、日常の一部として自身の人生を作つくるほどの経験に興奮することで現実感が生じる。

*「現実感」は「声」（聴覚）に刺激された肉体的な感覚であり、記憶の想起ではないので勘違いしないように。「どこだかわからない山の風景」は想起などできない。

問二

日本の近代文学における子ども向けの本は、子どもを純粋な存在、教育すべき対象とみて国家の理想通りに育もうとする、近代国家の論理に従うものであったという意味。

*「わかりやすく説明せよ」と設問条件にも明示されているように、「無垢」「無知」など「 」付の語句をそのまま解答表現に用いないこと。

*当時の筆者が「子どもの本能でかぎ分けていた」というのだから、この「近代性」は誰の目にも見える「共通語」など書かれたものを指すのではなく、（いわば「支配する側の臭い」ともいうべき）近代国家権力の「論理性」という性格である。（マイネッケの言う「国家理性」、すなわち国益のようなものを意味している。）

問三

前者は、地縁・血縁を超え、国家内で幅広く理解される人工の共通語である書き言葉であり、後者は、家族・地縁に支えられ、風土、習慣、伝統を確認する、対話的な即興の話し言葉である。

*「近代の文学と口承の物語とは、～と～のちがいだ」とあるのだから、その「ちがい」を説明する解答に「近代の文学」「口承の物語」を用いるのは循環論の誤謬である。

*「わかりやすく」という条件はない。安易な「自分の言葉」は極力避けること。

問四

近代が見失ってきたものを取り戻そうとする試みが、古代の口承文学の世界を解読した近代の学問的発見によるという逆説的事態に、筆者は両義的な感情を抱くということ。

* 「複雑な思い」という表現自体の置換を忘れないこと。

問五 * 文系問題

近代の文学が守ってきた文学観における近代国家の論理から離れ、共通語を前提とせず、血縁・地縁に支えられ、地方の風土・習慣・伝統を確認するための前近代的な口承の物語を現代において再評価する。これによって、力強く魅力にあふれた作品を書こうとする、現在の文学における試み。

* 「近代文学」のままでもなければ、「地縁・血縁の世界への復古」でもなく、「口承の物語＝地方の風土、習慣、伝統を確認する言葉」を取り込むことによって、「現在の小説」を「力強く、魅力にあふれた」ものにしようとするための「試み」である。